



同志社人物誌 (47)

大塚節治

飯 峯 明

第十三代総長大塚節治先生（一八八七—一九七七・総長在任一九五〇—一九六三）について語るのはむづかしい。先生自ら「回顧七十七年」（一九七七）という六五〇ページの自伝を残しておられるし、また「神の算盤」（一九六五）という小著にも「私の略歴」と題した過不足のない文章があつて、限られた紙数にそれ以外のことを述べるのは不可能に近い。また逸話らしいものを語るには私は必ずしも最適ではない。しかし先生を知らない人々が前記の書物を手にするよすがにでもなればと筆を取る次第である。

先生は広島県高宮郡飯室村（現在は広島市安佐町飯室^{いひむろ}）で沖田家の六男として生を享けた。六男四女の一〇人兄妹であつたが二人の兄と二人の姉は夭折した。もと裕福な農家であつたが先生の少年時代には既に家運も傾いていて、それだけに立身出世の志は強かつた。十七円余を懐中に同志社を目ざして故郷を出られたのも、苦学しながら卒業できると伝聞したからにはかならない。しかし現実はずのほかに厳しく、退学したり病氣になつたりしながら一年おくれて普通学校を卒業したのは、一九〇九年二十二歳の春であつた。二年

生在学中に寮生活を送るようになり友人先輩に恵まれた。すでに広島時代にキリスト教に接してはいたが、上級生のすすめもあって日野真澄教授より洗礼を受け、以後生涯を通じて忠実な同志社教会員となつた。

しかしこの受洗は急激な回心によるというより、漸進的な価値意識の転換によるものでそれには比較体験という遍歴を伴っている。家庭の浄土真宗や当時影響を受けた唯物論的進化論思想、さらに儒教の諸思想を少年なりに比較体験しつつキリスト教を選びとるという仕方である。そしてそれによって財産・名誉・地位・権力等に対する野心は、奉仕・献身・道義等という内容へと転換されたと自伝にある。しかし倫理的向上心の強さに比例して、欲望や感情の起伏などそれに反抗する内なる性向も強く、その間の闘いは壮烈なものがあつたようである。ともかくこの漸進性の傾向は先生の「性格」にまでなつていたと考えられる。

普通学校を卒業して先生は神学校に進学する。神学校は当時予科二年本科三年の課程からなつていた。神学校に進んだのも、直接伝道や社会事業は自分に向いていないと自他と



もに認めていたため、神学の学問的な開拓を自ら意図し、周囲もそれを期待したからである。一九一二年神学校は専門学校令による大学神学部となり、同年本科二年の途中で退学して渡米留学、ニューヨークのユニオン神学校でBDの学位を、並行してコロンビア大学でMAの学位を取得し、一九一六年秋帰国し神学部助教授に就任、一九年に教授昇任、時に三十二歳であった。翌二〇年に同志社大学は大学令による大学に昇格し、形式内容ともに整備されるが、神学部は文学部神学科となった。在外研究員の制度もできて二四年九月から二五年四月にかけて渡欧、パリのプロテスタント神学校に学ぶ。ここではフランス語の習熟が中心となっているようだが、ドイツにも足をのびして見聞をひろめた。

この間の研究成果が「基督教倫理学序説」

(一九三五)となってあらわれる。先生が歴史神学や実践神学よりも理論的な組織神学を専攻されたのは、理論学を得意とされたからであり、また倫理学に関心をより多く注がれたのは、少年時から不正を憎み正義を渴望する衝動が強かったからである。本書は六〇〇ページをこす当時では稀な大著であるが、ここにも先生の漸進的遍歴のあとがみられる。その序文の中で、キリスト教信仰の真理性の認識論的基礎づけのために「最初ロイス、ジェームズ、ベルグソン等に親しみ、後カントやシュライエルマッヘルやリッツェルに帰り、更にヴィンデルバント、リッカートさてはサバチエやメネゴールの象徴信仰主義等そのぞき、またトレルチやヴォッバーミン等に親しんだが、結局、新フリース派の認識論において一時の満足を得ていた。……その後、弁証法神学や同僚の啓発、学生の批評、刺激等により、ついに信仰が人間の地盤を越え、神の地盤に立つもの……なることを悟るに致した」と述べ超自然主義や文化哲学的立場を脱却したと語っておられる。しかしまた「不相応に思えるほど歴史に溯っているが、これは

信仰や靈感の美名の下に一時的感想や主観的

独断を振りかざす弊を」避け、更に「一極から他極へと動く振子」のような時代思潮を念頭におきつつそれに掬われたいことを期したためであった。ここには福音的であつてしかもリベラルな同志社神学の特徴がよく示されている。この学問的な態度は晩年に執筆された「キリスト教要義」(一九七一)にも見られる。この書は「世間一般の教養ある人々」のために書かれていたが、私の見たところでは、十分に歴史的かつ主体的であつて、わが国で出版された教義学の教科書としては今日まで最良のものといえる。先に引用した序文には、また「能う限り借家住いを避けて、たとい材料は他から仰ぐも、自分で自分の家を建てようと試みた」とあるように、一定の図式や枠の中で構築されたものには厳しい批判を下した。例えば、桑田秀延著の基督教神学概論(一九四一)は教義学のロングセラーとして有名であるが、これについて「本書は九九パーセント、バルトに依拠したもの」であるとし、「自家の識見の表明がないことは頗る不満」であり、そのほか「頗る不充分」「遺憾」「甚だ不明瞭」「曖昧」「物足りなさ」「問

題の困難なる処を正直に取上げていない」など、激越なことはが連ねられている（基督教研究第十八巻第四号、一九四一）。「妄評多謝」と末尾にあるが、これは極めて正当な批評であり、それだけに先生の学的誠実さと激しい気性を示す稀有な書評となっている。

先生の神学的業績について紙数の関係でこれ以上述べることはできない。しかし研究者の道を進もうと志しつつも、無私無慾な献身への努力が、かえって人々の信頼を得て、五回も文学部長に選ばれ、困難な戦中期にも短期ながら大学長の責任を負い、戦後も大学長や理事長・総長の職務を歴任するという「二足の草鞋」をはかねばならなかったことは、歴史のイロニーというべきであろうか。このような地位での先生の考え方は、法秩序の維持という概して保守的なものであったと思われる。遍歴ということは本質的に個人の内面にかかわることだけに、激動期における「集団」とか「組織」とか「戦術」とかの語は、頭ではわかっていても心では納得のいかない忍耐の事柄であったように思う。しかし先生は、決して自己の周辺に権力を集中しようとするタイプの政治家ではなかった。一九五四年、

秦孝治郎氏を招いて理事長の職を委譲せられたのも、その一つのしるしである。大塚・秦先生がともに、教職員組合の関係者からはなしのわかる「人情家」と評価されていたことも興味深い。

また先生は、晩年玄塚に家を建てられるまで、教え子の牧師たちを慮って、自分の家を持とうとされなかったが、そのためおよそ借家というものがなくなる戦後は、大層苦勞せられたようで、この辺にも先生の一徹さがうかがわれる。

最後に書き落としてはならないことがある。一九一〇年神学校学生時代、日野真澄教授のすすめで奨学金の出資者であった大塚精一氏の一人娘、薫と婚約、二年後養子縁組して大塚姓をついだ。しかしこの年前述のように渡米したため新婚生活は僅か一四〇日で終止符をうつ。しかも一五年早春、夫人は病歿し、遠隔の地でそれを知らされた先生の悲痛は想像するに難くない。翌年秋帰国された先生は永眠の二週間前に書かれた夫人の遺書を、その命日毎に生涯読まれたとのことである。夫人はそこで先生が沖田姓に復籍されることを願っているが、先生は最後まで養父母

に孝養を尽くされた。このように信義を重んじた先生だけに、一八年第七代社長原田助氏と学内諸学校教員との対立が生じたとき、恩師日野教授の辞任に殉ずべきか否かで大層苦悩されたが結局神学教育の使命を優先させられた。そして義理人情で後進を束縛してはならないという考えを、それ以後実践された。

なお前夫人歿後二年、熊本バンド出身の大先輩宮川経輝（一八五七—一九三六・大阪教会牧師）の三女茂代と一九一七年再婚し、三男三女を得られ幸福な家庭を築かれた。長男肇氏は女子大学教授、次男達雄氏は文学部社会学科教授である。先生は勲二等瑞宝章（一九六四）、京都市名誉市民（一九七三）などの榮譽を受けられたが、一九七七年十一月十八日、九十歳で永眠され、西山霊園に眠っておられる。また愛媛県伊予郡中山町中山の浄光寺にある大塚家墓所にも分骨安置された。茂代夫人もその四〇日後、十二月二十八日先生の跡を追うように天に召された。

（大学神学部教授）